T：へー。

S：あんまり困らへんかった。おやつ買いに行くときも、はーって見とったし。／／T：いつも買いに行くの業務用だからさ、一人用ってこんなに(…) ／／あー、ちっちゃいんだなって思った！それは、思う。／／T：業務用しか見た事無かったから。／／

筆者：30人いたら結構な量だもんね。

T：業務用のスーパでしか買わなかったからそこしかないと思ってたもん。

筆者：あー、普通のスーパーが分からない。

S：業務用のスーパーが持ってくるような野菜とかやったから。どんって。

(Gr 3)

Sは食材の売っているスーパーや薬局にしばしば行っており、ものの値段に触れる機会が多く、値段についてのギャップはそれほど大きく感じていない。しかし、Tが業務用のものと比較し、通常のスーパーで売られている量の少なさへの驚きの発言に対しては、非常に共感していた。

児童が個人で行く買い物先がどのような場所であるかによってこういったギャップの大きさに影響があることが次の語りより読み取ることができる。

筆者：じゃあ、施設出てからすごい困ったってことはないんだね。

S:まぁ、私はないけど他の子らは困っとるやろな。

筆者：どういう意味？

S：だって、私が買うようなもんはだいたい自分のいるようなもんやったけど、周りの子らは、まぁ、付き合いの方が大事やったんやろね、そういう付き合いになんか行っとったから、遊びにしか使ってなかったみたいやし。まぁ、人にもよるんちゃうかな、それは。

(Gr 3)

Sは自分と他の入所児童のお金の使い道について違うために退所後の生活に影響している可能性を述べている。

ii：他者との関わり

内容や頻度はさまざまであるが、集団生活を行う施設での生活において他者との関わりは少なからず存在する。以下はそのような他者との関わりについての語りである。

筆者：それじゃあ、次は地域との関わりについてね。イベントやボランティア、遊びなどで地域の方と交流してましたか？

T：うち、学習ボランティアは来てた。いつも一週間に2回。筑波大学の人が来てて、いつもやってた。勉強教えてもらってた。

C：うちも学ボラついてたよ。小学校と中学校と。高校はなかったけど。しかも超お嬢様についてもらってたね。

T：でも中学3年生は3回になる。受験だから。受験性指導って言うのがあって。／／C：うち英語やってもらってたね、主に。／／1時間しかやらないけど。

C：うち2時間、いつも。みっちり。

(Gr 2)

地域との関わりについて、イベントやボランティア、遊びなどを例示した後の語りである。T、C共に学習ボランティアが即座に出てきており、自分達がどこの誰にどのくらいの頻度で勉強をみてもらったかが鮮明に語られている。この後に以下のような語りが続く。

筆者：勉強だけじゃなくても、もっと遊びとかでも。
T:あー、うちはね、空手習ってた。交流施設の交流。
筆者：施設の中で？
T:そう。だからなんか。空手とか好きじゃなかったんだけど、やらされて、いつのまにか知らないけど黒帯持ってんの［笑］小学校6年から。地域の交流なんだけど。
筆者：じゃあ、地域の人たちも？
T:うん、一緒に参加して、うちの施設に。そうそう。学校の友達とかも。心身高めるためにさ。こう、せいっせいって。
C:うち地域と交流(…)まぁ、あったかな。／／T:あったよね、クリスマス会とかね。／／あと、うちバザーとか結構人来てたね。うちの建物使ってうち4階建てだったんですよ。屋上入れて5階建て。そんな中でバザーとかで地域来たり。あとは、クリスマス会もそう。
T：クリスマス会来たね、いっぱい。
C：うちクリスマス会でいうと、今国会議員の石原伸晃とか来て。あとね、区長とか。うちの施設長が区議会議院やってんだけど、それで。よく色んな交流してたよ。
M：全然違うね。

(Gr 2)

筆者から遊びについての語りを促す。ここでは、Tが学習ボランティアの時と同様に、個流行事であった空手を即座に挙げている一方で、Cはあまり反応していない。後に、Tにクリスマス会について反応を促され、施設長の役職の影響でさまざまなイベントがあったことを話している。最後のMによる発言からもわかるが、施設が行う、または参加するイベント・行事はその施設により多様である。それは以下の語りからも読み取れる。

筆者：招待行事とかは結構頻繁に受けるものなんですか？
C：施設によるんですよね。うちの施設はすっごいもう（…）。
W：なんか、施設さんによっては自分達が子供との関わり大事にするって外部の方とかボランティアの方とかあんまり積極的に呼ばないってところもありますし、2人が暮らしてたようなそういうの大事にするとこもありますし。

(Gr 2)

この語りの前に、TとCが招待行事についての話で盛り上がっている。招待行事の頻度についての筆者の問いに、CもWも施設によると語っている。外部との関わりをあまりもたないように意図している施設もあればイベントや招待行事に積極的に参加している施設もある。Wの最後の発言は、

話がつきない語り手同士の盛り上がりからも伝わってくる。

筆者：[笑] じゃあ、次ね。地域との関わりについて聞きます。イベントとかボランティアとか、遊びなどで地域の人と何かしてたりした？
S：(…) そういうのは全くなかったような気がする。(…) 施設としての参加は。
筆者：自分で学校の友達とかと一緒にどっかに遊びにとかはあった？
S：うん。まぁ (…)、あたしは友達が少なかったけど。／／筆者：そうなの？／／S：[うなずく]
ちょうどうちんところは神社があったから、そこの夏祭りとかお正月の餅まきとか、そういうのには個々に参加しとって (…)
筆者：参加したい人だけって感じ？
S：そうそうそう。施設自体はあんまり周りの地域から好かれては無かったから。
筆者：なんでそう思うの？
S：いやー、もう (…) 排他的？ちょうどそこの近くに部落もあったからさ。あとは、なんていうか、保育士さん自体がそこの地域から集まってなかったのさ。もうｔ[宗教名] 教の系列で、色んな所から集められてきとったから、もう、勝手も分からへんやん。やから、余計　地域交流とかもなかったんやと思うし。

(Gr 3)

Sは個人での地域の人との関わりは多少あるものの、その発言の仕方からあまりなかったことが読み取れる。施設での参加が全くなかったこともこれに影響してるのであろう。また、後半部の語りからは周辺環境的な課題も指摘された。立地する地域に独特の風習などがある場合、地域外から来た職員が主であると地域交流にも影響することを伝えている。

(2) 退所後の生活へ与えた影響

ｉ：習慣化

以下は生活習慣として今も続いている行動などがあらわれている典型的な語りである。

W:結構Tはちゃんとしてるよね。／／T:あー、ちゃんとしてる！自分で言うのもなんだけど、あたし一つのもの買ったら、すごい長く使うの。だから東京来て、ころころ物買ってるの見てすごいなって思ったの。服とか何でも。今でもそうなんだけど、靴下とかすぐに洗濯　機に入れないの。洗濯板ってあるじゃん？／／
W：あー、ちゃんと洗うんだ。偉いねー。
T:そう。今でもちゃんと洗ってるの。洗濯板で洗ってから洗濯機。そうしないと気が済まないの。そういう習慣になってるの。
W：偉いねー。
(中略)
T:でも、施設の職員は「汚いから捨てなさい」ってすぐ言うんだけど、あたしは長く使いたい人だから、洗って使うの。靴下も穴ぼこ開くまでちゃんと使うし。／／C:施設にいると　そうなっちゃうよね。／／洗濯板で洗うとすごい綺麗になるんだよ。そういう習慣なの、うちの施設は。

(Gr 2)

洗濯板で靴下を下洗いをするという長年の習慣が退所後の今の生活でもずっと続けられていることが語られている。また後半部のTとCの語りより、ひとつのものを長く使う習慣、ものを大事にする習慣などが施設の生活によって身につけられていることがわかる。

C：あと、招待受けた時に、いかにしてお礼状を書くか。そうするとまたさ。／／W：そういうの書くのが当たり前になってるよね。／／T：うん、当たり前。
W：日向ぼっこでも何か頂いた時も、なんかこうお礼状書こうかって言ってくれる方が多くて。
T:なんか、もらって返事しないってなんか変よね。／／M：いや、いい習慣だね。／／
T：高3年の時に、炊飯器とかもらった人にすごい気合い入れてお礼状書いたら、すごいってほめられて。他の人は書いてなかったらしくて。お礼状書くのなんて当たり前じゃんって思ったけど。そういう習慣なの。

(Gr 2)

この語りからは、招待行事を多く受けていた施設に暮らしていたCとTのお礼状を書く習慣についてが伺える。日向ぼっこでは色々な人から食料などを提供してもらっているが、それに対するお礼状を書こうと言い出す人が多いこと、Tのお礼状を当たり前と捉えているエピソードからも、招待行事が単なる他者との関わりの場ではないことを読み取ることができる。

筆者：（中略）んじゃあ、掃除や洗濯などの身の回りはどう？自分で、もしくは職員と一緒に行っていたか、その印象や記憶について教えて下さい。さっき自分の場所がなかっていう話が出てたけど、廊下とかの共有スペースを掃除してるときって自分の家を掃除してる感じ？
S：学校やね。
筆者：学校と同じ感じってこと？
S：うん。
筆者：掃除しろって言われたからきれいにしましょうねっていう感じ？
S：そうやね。いつもやっとることやしって。自然な流れ。（…）やったけど、中学生ぐらいになって、新入りさんが入ってくると、なんでやらなあかんねんってそっからぐだぐだになったけど。／／T：うん。／／
S：え、これが普通ちゃうの？っていう。

(Gr 3)

ここで施設での掃除をSは学校と同じであると表現している。毎日行っていることのため、習慣となっているが、自分の生活場所という意識をもったうえでの掃除ではないことがこの表現よりわかる。

筆者：掃除徹底してたんだね。
S：やるのが当たり前やったからなー。
T：うるさい職員がいたのさ。／／S：どこにでもいるよね、そういう人。／／

T：使い終わった歯ブラシとかさ、ためてたのうちの施設。／／S：あー、カビとかに？／／

T:そうそう。で、うち今でもためてる。使えんのさ、それがまた。こう隙間とかさとどかない所。

S：スニーカー洗うときとかも使うさ。／／T：あー、使う！スニーカーの裏の石とか砂ついてる所ね。／／そうそう［笑］

筆者：すごい、本当に徹底してたんだね。

T：そう、なんかすごい徹底されたんだよね、施設でね。だからすごい習慣づいてんの、それが。

S：傍からみるとちょっとおかしいんだけどね。／／T：ね、施設徹底してたよね？／／

W：あー、大舎はそうだよね。私GHだったからそんなに。

T：あたしすごい徹底してる。

(Gr 3)

施設で用いていた掃除道具が現在の生活でも同様に使われていることの語りである。掃除の徹底ぶりに関してSが厳しい職員がいたためと同意するとTが施設での掃除道具であった歯ブラシを思い出す。同様に歯ブラシを使っていたSと共にそのような習慣付けがされていることを改めて述べ、Wにも共感を求めるが、GHであったWは否定しながらも、大舎制の特徴であることを述べている。

掃除に関連する道具は次の語りでも引き合いに出されている。

S：なんか青い石けんとか置いてあんのね。強力石鹸みたいなやつ。

W：あれ特有だよね。

(中略)

S：クリーナーみたいなやつやろ。液体ワックスというかなんというか。／／T:なんか忘れちゃったんだけど、あるんだよ施設特有の。／／大きいな。

T：あれを施設出てから超探した［笑］

S：でもあれ売ってないんだよね。

T：ないよね。そう、施設に売ってる物って売ってないんだよね。なかなかね。

筆者：業務用なんだろうね。／／S：そうそう。だからあたし一回ライオンまで問い合わせた。

／／

T：施設出てからも抜けないのよ、習慣になってるから。床ふいた後もさ、クイックルワイパーでやってからなんかやりたいの。施設いつもやってたじゃん。

(Gr 3)

ここでは、施設で使っていた業務用の洗剤を退所後の生活でも使用したくてなんとか手に入れようとしたSのエピソードを交えて語られている。業者にまで問い合わせたSの行動やTの最後の発言から、施設での掃除が本格的に習慣化しており、その掃除方法までもが退所後の生活にも反映されていることがわかる。

筆者：気持ち的なものでもいいよ。

T：我慢できるよね。列に並ぶのとかさ。

S：あー。

T：なんかさ、結構さ、行列に並べない子とか多

いじゃない？「ママ、まだー？」とかさ。そういうの耐えられるよね。／／S：そうそうそう。／／

T：我慢が普通だったからね。並ぶ事が。(…) 結構待てちゃうかも、平気で。

S：待てって言われたらいつまでも待てちゃう。

筆者：やっぱそういう集団生活がすごい身に付いてるっていうか、(…) しみてるんだね。

S：逆に単独で生活すると困る事もちょくちょく出てくるんやけど、いつのまにか、「あれ、できるようになっとるやー」って。(…) 適応能力は他の人よりも高いかもしれんな。環境が　どんだけ変化しても。

(Gr 3)

施設での生活が今の生活に与えている影響について、Tが述べた我慢できるという発言より、Sは集団生活によって得られたこととして、環境の変化に対する適応能力の高さを挙げた。Tの発言から色々思い出すことが多いSだが、ここでは集団生活というキーワードから自らの退所後の一人暮らしを評価している。

ⅲ：職業の選択

ⅰやⅱでみられたように、施設での生活によって得られたものが、自分の職業や将来に影響していると感じていることが読み取れる以下のような語りもいくつかみられる。

M：俺はハローワークで受けたテストの結果で出たのが、別に何の興味もなかったけど、福祉系のやつが強く出てるよ適性としてって言われて。やっぱり影響あったんだろうなって思うよ。そういうのがこういう形で出て来たって言うのが。

(Gr 1)

W：じゃあ、Tが料理上手なのはやってたからなんだね。

筆者：りんごもすごい上手にむいてたもんね。

W：いまは調理の仕事してるんですよ。

筆者：あ、そうなんですか。

T：そうなんです。

(Gr 2)

ここでは、Tの料理の上手さと現在の職業についてWが発言しているのをTが嬉しそうに聞いている。施設での調理体験が退所直後の現在の生活に仕事として影響している。この語りには以下のような会話が続く。

筆者：施設で調理してて今仕事してるって話だったけど、Cさんは調理できなくて今困ってる　ことってありますか？

C：調理できてなくて？あ、でも自分は専門学校出たんで、調理の。

W：免許も持ってるんですよ。／／筆者：あ、そうなんですか？／／

C：自分、最初は調理やりたかったんじゃなくて、小学校の時に料理クラブに入ったんですけど、食べたくて入ったんですよ、最初は［笑］／／筆者：あー、よくあるよくある［笑］／／

T、W：食いしん坊［笑］

C：いや、皆で作ってその作ったやつ食べるんですけど、作ったやつを担任に持って行って喜　ばれるのが嬉しくて。で、料理やってんですよ。
T:ね、いいよね。料理ね。／／C:だから、まー、自分は料理は出来るんで。施設でやってなくても、学校でやったんで。クラブにも入ってやってたんで。施設でできない分そっちで　やってましたね、自分は。／／

(Gr 2)

施設のプログラムにより、食事の調理をする経験がほとんどないなかで、小学校での調理および体験から料理の楽しさを見出し、将来の方向性を決めるひとつとなっている。施設での調理体験がほとんどなく、あまり積極的に会話に参加していなかったCであるが、調理の専門学校を出た話をきっかけに、小学校のクラブから始まるエピソードを積極的に語っている。また、ここでもTの発言より、料理に関して好意的な発言がみられる。

C：仕事でね。できればやっぱり人と関わってる仕事がしたいと思って、今職業訓練校行って、介護の仕事やろうとしてるんですけど。／／T：耐えられるよね、ある程度の事は。心の面　でさ。なんか、待つ事？嫌な事とかさ。／／普通の家庭が分からないけど、分からない分、　経験できてるし。施設が悪いって訳じゃないし、普通の家がいいって訳でもないなって思う。親がいたら何もできないと思うんだよね。同じ学校に30代の人で、未だに実家にいて、洗　濯とかしてないっていう人もいて。
W：気持ち悪いって思っちゃうよね。
T：でも、そういう部分ではさ、一人暮らしもそうだけど、家にいる子はいつまでたっても、　親がいる限り大丈夫っていうのがあるじゃん。うちらはさ、やらなきゃいけないっていうあ　れだから。そういう部分では成長できると思う。／／C:独り立ちしないとっていうのがあるから、そのための準備はできるんじゃないですか。普通の家にいるよりは。／／普通の家　にいたら多分だらだらになってたと思うよ。こういう施設でしか教えてもらえないことって　あるよね。
W:あんな大勢で一緒に暮らさないもんね、普通ね。知らない人と。

(Gr 2)

ここでも施設での集団生活や他者（職員）との関わりの影響を受け、仕事を積極的に選ぼうとしている姿勢が伺える。また、実際に同じ学校に通っている人物の例を出しながら、再び、自立していない人への嫌悪感をCとWがあらわにしている。それに対し、Tは施設で暮らすという状況が入所児童に自立の必要性を自然に生ませていると発言し、CとWもそれに同意している。

同様な語りが以下に続く。

T:だからかもしれないけど、高校卒業の時にホームヘルパーの資格とか取っちゃったりとかさ。／／W:あー、持ってるんだ？／／うん、持ってる。なんか人にしてあげたいんですよ、　自分がやられて来た分。
C：だからそういう道に進むんだよね。自然とね、

体がそうなってるんですよ。

M：僕もそう思いますよ。ハローワークで福祉関係のが出てるよって話。

W：やっぱ退所してから施設の職員やりたいって人多いですよ。

T：うん、多いね。恩返ししたい、みたいなさ。施設にいた時期が長いからこそいつか戻りたいって思うんですよ。

W：GもNも［日向ぼっこに来る人の名前を挙げて］施設職員になりたいって言ってたし。モデルがそれしかないっていうのもあるのかもしれないけど。／／M：あー、そうかもね。／／

C：親代わりでもあり、仕事でもあるからね。

(Gr 2)

引き続き、将来の方向性が施設での経験による影響が大きいことを語っている。ここでWが施設への帰属意識がある人が他にもいることを発言した上で、入所児童にとってモデルとなるものがそれしかないことも述べている。これに対し、Mも納得し、Cは職員について、児童にとって親の代わりであると同時に施設職員という職業であるという冷静な見方をしていることがわかる。

ⅱ：身に付いた感覚

語り手自身または他者が評価する語り手の性格より、施設での生活で身に付いた感覚や性質についての語りである。

筆者：その職員の方と食材とかの全く買い出しをしなかったということに関してはどうですか？例えば値段とか。

M：一応僕はまだ途中から入ってるからっていうのがあるけど、他の子だったら、ねぎが一本いくらだとか牛乳一本いくらだとかあまり感覚ないだろうね。だから、工夫して買うことの大事さとかはないかもしれないね。どこどこのスーパーが安いからあっちで買い物しましょうとか、こっちで買い物しましょうとか。そういう発想がないかもね。でも逆におもちゃに　関してはやる子はやるかもしれないよね。でも、全体的に見たら、やっぱりお金にそんない　シビアになってるやつはそんなにいなかったかな。

W：結構、今でも施設さんとかに伺うと、仲良くなるためのツールとして、もらったものを他の子にあげるみたいなことはあるみたいですね。女の子だったらメモ帳とか、男の子だった　らお菓子とか。かわいがってほしいからお菓子あげるとか。ちょっと買い物の話とは離れちゃいますけど、ものをあげるとかはしてる子はしてると思いますね。(…) 取り入るための手　段といえなくもないですけど。

(Gr 1)

買い物しなかったことによる値段などの把握具合についてMは感覚が身に付いていないため、工夫して買い物をするなどの行為はしないのではないかと予想している。また、お金に関してもそれほど執着心がない可能性を指摘する発言に対してWが他者と仲良くなるためのツールとして私物をあげてしまう例を出して同意していることが読み取れる。

M:(中略)あとは、いい意味でお手本が必要だよね。こうあるべきなんだねっていうのが。見て育つからさ。もしかしたら、今パッて思ったのは、施設って言うのは子供の部屋はあるんだけど、大人の部屋（…）宿直する部屋はあるけどあんまり行かないし、用があっても長くいないからさ。子供のときってお母さんお父さんの部屋とかお父さんの書斎とかに行ったりするから、大人の部屋はこうなんだっていうのをみて学ぶけど、施設の子供はそういうチャンスがないよね。だから、何が汚くて何がきれいなのかがっていう、価値観の形成はできてないかもしれないね。

(Gr 1)

ここではMが児童の手本となる大人の空間に関して述べている。施設でも職員の部屋はあるが、児童が気軽に行ける所ではなく、児童が手本とできるような空間の存在が、きれい・きたないの勝ち基準を形成するうえでも重要ではないかと語っている。この語りには以下のような会話が続く。

筆者：なるほど。そういう意味では自立支援施設だったら、ずっといる寮母さんの部屋とか行ったり、寮母さんの行っていることっていうのは日常的に目にできますよね？

K：寮母さんの部屋っていうのは行けないんですけど、リビングにいるときは見れましたね。

筆者：それは今Mさんが言ったようなお手本にはなってたと思いますか？

K：うーん（…）。

M：思うんだけど、そういうのってやっぱ生活に溶け込んでるからさ。多分、そういうところって用がない限り行かないでしょ。寮母の所も基本的にそこで生活している訳だから、やっぱ　り区切りつけてるし。家族ぐるみって付き合いじゃないから、寮母は寮母で生活してるっていうのを聞いたことはあるけどね。やっぱり、でも子供の人間形成において大事だと思うから、大人の生活スペースって言うのは必要なのかもしれないよね。あるでしょ、生活してて、　こっからはお父さんの聖域みたいな。

(Gr 1)

施設の職員の勤務体制の違いによって先の手本のような空間が存在し得ないかについて筆者が問うと、Kは部屋には行けないと前のMと同じ内容の回答を述べた。またKが手本となるかどうか悩んでいたところに、Mが児童が自ら気づく困難さを指摘し、大人の生活スペースに関して改めて見直す必要があることに言及している。

T:でもお風呂って楽しいよね、施設のお風呂って。皆で一斉に入るからさ。こう、じゃばーんみたいなさ。／／C：でも幼児が先入ると絶対湯船で小便してんだよ。／／

[一同笑い]

C：絶対いるんだよ。

(中略)

C；職員に怒られてたけど、俺一回一回抜いてたもん、お湯。結構でかいんだよ。これ［机をさして］よりでかいんだよ。／／T：なんかさ、職員

さんに「一斉に洗うよ」って言われて、 皆で一列に立って一斉に洗うの。で、流してそのまま湯船入って。バタ足とか、潜ったり。／／

(中略)

筆者：じゃあ、普通の家のお風呂とかってすごい狭く感じる？／／T：狭い！すごい狭いよね？／／

C:しかも自分今ユニットだから、足のばせないし、どうしようかと。

T：うちユニットじゃないけどさ、狭い。ずっとそういう場所見て来たからさ。ちっちゃく感じる。

C:逆に銭湯でも、あっちの方がでかかったなって。／／T：うん、銭湯ぐらいでかかった。自分の家はちっちゃい。ね！／／

C：うん。

(Gr 2)

前半部のTとCによる施設での入浴がどれだけ楽しかったかの語りより最後の二人の今の生活での浴室の狭さに関するギャップと驚きが非常に強調されている。ここでは、大舎制に10年以上暮らしていた二人が主な語り手となっており、GHの生活が長いWは二人の会話を笑って聞いており時々相づちを入れる程度であった。銭湯のような風呂に入っていた感覚が抜けずに、一般の浴室を狭いと感じるのは大舎制という施設形態によるものであるともいえる。

T：でも、集団生活とかは平気だよね。普通に集団でいれる。

C：自分は一人でも大丈夫だけど、皆といる方が落ち着くっていうか。

W：2人は圧倒的に協調性はあるよね。

(Gr 2)

大勢で暮らす施設での生活から集団生活に関しては大丈夫だと語るTに、Cが集団の方が落ち着くという意見を加えている。これに対して、日向ぼっこでの関わり方からみたWの発言からは、そのような集団生活の中で過ごしてきた二人だからこそ得られた協調性であることが強調されている。

T:誰よりも思いは強い訳ですよ。施設に対しての。

筆者：勢いがすごいもんね、話の［笑］

T：施設にすごいお世話になったからこそ、思いが強いんですよ。だから、戻りたいっていうのもあるし。／／W：調理師さんになって戻りたいって。／／

筆者：あー、だから。今は勉強中なんですか？お仕事もうしてるんですか？

T：お仕事中。

(Gr 2)

自ら施設で色々なことを学んだという発言が幾度もみられたTが、自身が調理師になって施設に戻りたいという思いについての語りである。Wもそれを知っており、Tが施設への帰属意識を持ちながら将来の方個性を決めていることが伺い知れる。

C：うち中学校ぐらいになったら、大舎なんだけ

どGHもできて、あのGHに行ってみたいなってずっと思ってて、卒業まで。大舎なんだけど、入りきらない分を小さいGHで何軒かつくったんすよ。今も4つぐらいあるらしいんですけど。そこに行きたいなと思いつつ。

T：でも本当にね、100人いた施設からね、6人とかのGHになった瞬間の（…）

W：あ、寂しかった？／／T：寂しさ！耐えられないよね。／／

C：でも俺ら行ってみたかったもん。でも、そこに残らなきゃ行けなかったの、昔からいるやつは。やっぱり普通の一軒家とか借りてる訳だから、やっぱそっち行ってみたかったっていう。

筆者：なんか違いとかありましたか？

T：にぎやかさが全然違う。

W：ホームシックみたいな感じなのかな？

T：施設出るときも寂しかったもん。大泣きだよ、本当に。

筆者：じゃあ、一人になったら（…）／／W：一人になるんだ。って感じだよね。全部一人でやっていかなきゃいけないんだって思うよね。／／

(Gr 2)

大舎制の施設からGHに移るケースはWがそうであったように、人数は限られるもののよくあるケースである。また、GHでなくとも、退所後の生活は基本的に一人であり、大舎の時のような何十人単位で生活をすることはないであろう。空間から家具、細かな生活の仕方まで違うであろうこの変化はこの語りからもわかるように、児童が大きなギャップを感じることは想像に難くない。

(3) 生活に関わる空間・環境

i：個の空間

施設入所期間において、年齢が高くなるにつれ、部屋の同居人数が減るまたは個室になる傾向がみられる。また、それに伴って個人が所有すると感じられる空間の存在も現れるようになる。この現状が垣間見ることのできる語りがいくつかある。

筆者：掃除や洗濯などの身の回りはどうでしたか？自分で、もしくは職員と一緒に行っていたか、その印象や記憶について教えて下さい。自分のもの感というはなしがありましたが。

K：掃除、洗濯は自分でやってましたね。／／M：掃除も洗濯もっていっても、僕のところは　共有スペースだから。自分っていうスペースがないから、あるとこはあるんですけどね、自　分とこはなかったから、自分のために掃除するっていう感覚ではなかったですね。／／

筆者：自分の寝てる部屋は？

M：だって、きれいにしても［大部屋だから］小学生とかが汚すから。だから、腕力にもの言　わせて汚くするなよって言ってたね［笑］

(Gr 1)

掃除や洗濯についてKが自分でやっていたと発言した直後にMが共有スペースと自分のスペースについて語っている。個の空間がないことが自分のために掃除するという感覚を生まないことにつながり、自分が毎日就寝するスペースについても、共有部屋であることからやはり自分の場所ではな

いことがわかる。

以下の語りでは、Mが自分のスペースの必要性について述べている。

M：私物に関してだけど、だから、教科書とか自分のおもちゃでもなんでもいいんだけど、要は服とかはたんすがあるから、自分のスペースにぱしっと入ってるけど、自分のプライベートな物を置いとくスペースって結構ぐちゃぐちゃじゃなかった？

T：机の下に隠してた。

C：自分は、うーん（…）

M：全体的にね、個人じゃなくて。

C：んー、確かに全体的にはぐちゃぐちゃだった。もう全部ぼーんと。ぐしゃぐしゃになってる感じ。／／M：それはなんでなのかなって。俺は、きっちりそこがされてる所だから、

俺が綺麗にしてるから、お前らもやれって（…）／／

C：自分でそれきれいにする人もいれば、ぐちゃぐちゃのままの人もいた（…）よね？

T：うん。

W：私物置き場なんて覚えてないな。GHだと自分の部屋でそういうのがおけるんだけど。どうだったけなー。机の周りに置いてた気もする。／／T：うん、机の周りに置いてた、あたしも。／／

(Gr 2)

自分で洗濯をしていたとう話から、個人のスペースの話題に切り替わる。Mが明確な問題意識をもってほかの三人に問いかけているのに対して、Cは考える素振りを数回見せており、Wも記憶が曖昧であるような発言をしている。個人のスペースが汚いといえるかどうかについて少し迷う発言がみられた後、以下のような語りが続く。

M：なんでだろうね、僕が感じたのは先生達が指導するっていうのもあるかもしれないけど、どっちかっていうと個人のスペースがないから、もうぐちゃぐちゃで置いてるっていうのが当たり前っていうのかな。それがあったから、逆に他のとこはどうなのかなって。

C：うん、そうだね、きれいにしてなきゃ（…）。最初はぐちゃぐちゃだよ、確かに。／／M：うん、でしょー？／／

C：でもやっぱ気になる人はすごいきれいにする。

M：そう、そこが分かれるんだよね。だから全体的に（…）／／C：うん、考えたことなかったけど、確かにぐちゃぐちゃだよね。／／M：やっぱ、そうなんだ。

(Gr 2)

ここでMが個人のスペースがないことが散らかる原因だという考えを述べ、Cがそれに対し深く同意する。個の空間に対してあまり意識はしていなかったCだが、Mの発言後に施設の様子を思い出し、共有している空間だからこそ誰も意識せずに散らかり、その中できれいにする意識のある者が片付けていることに納得している。

T：好きな芸能人のさ、ポスターとかを貼りまくるんだよ。／／C：俺、最後誰もいなくなったと

き、もう天井全部コンサートのポスター。／／うちも！KinKi Kidsの堂本剛が大好きで。　寝る時におやすみって［笑］

C：寝るとちょうど上にあるでしょ。両サイドの壁も全部そうだったから。／／T：うちも大　好きだったの。堂本光一、あ、光一だ。／／大きくなって、自分の部屋みたいになれば色々できるから。最初やっぱできないね、スペースそんなないから。

(Gr 2)

個室では、大部屋ではできない、自分の趣味にそった部屋の飾り付けが可能になる。最後のCの発言が、高年齢になり、個室を与えられたことで好きなように部屋を使えることの喜びを伝えている。100人定員規模の大舎制の施設において一人または二人部屋が児童に与えられることは難しい。それは以下の語りからも読み取れる。

C：うん、それまで2人部屋とかで。2人だったけど独占してたけど。／／T：超贅沢やん、　1人部屋とかって。／／

(中略)

T：うちずっと皆同じだった。

C：自分高3で一人部屋なのに、中学生とかでもう1人部屋とかもいたからね。

W：うーん、私も小6かから中学までずっと一緒だったからな、兄弟で。

T：うち2年生まで部屋なかったもん、自分。幼児さんと一緒の所で寝てたの。

C:小学校はないよ。6年間、寝る所はなかったよ。だって、机は廊下でしょ？寝る時以外ないもん、部屋なんて。

(Gr 2)

大舎制での部屋は、児童にとって自分の空間であることは認識されていない傾向があるといえる。それは部屋で行う行為の選択の少なさからくる。限られた面積の空間を効率よく使うために家具などを入れないことで児童は就寝時以外にその空間を利用しなくなる。

また、児童によって処遇の仕方が違うため、必要な児童には年齢にこだわらずに個室をあたえるという処遇が一部の児童に不満を与える可能性があることがCの発言から垣間見ることができる。

ii：施設形態の特徴

語り手のほとんどが大半を大舎制施設で過ごしているが、その施設形態であるからこそ決められる生活のルールや空間の利用の仕方がある。

筆者：なんか違いはありましたか？大舎制の時とGHの時で。例えば、食事の配膳や食器の後片付けをする機会が大舎制ではあまりなかったけど、GHではそれができたとか。

W：大舎制の時の配膳の記憶はあまりないんですけど、なんか大きいお釜に入ったご飯とかをよそったりはしてた気がします。多分ご飯とかもお皿に出てきた状態で配ってたと思うんですけど、その日の担当の子供が担当の職員とだと思うんですけど。あんまり（…）、その大舎制の時の食事の当番とかはあんまり覚えてないです。GHの時

は、(中略) 友達と時々したりとかは。そこのキッチン使ったり、友達ん家でとか。あと、配膳とかは皆で協力してやってたんで、規模がそんぐらいなので。家庭的っちゃ家庭的で。あとは、子供感で、(中略) 協調して片付けをやるみたいなのはやってましたね。あと、なんか忙しいときとかは「洗っといてあげるよー」みたいなのがあったりして、そういうのは良かったかなって思います。助け合いみたいな。

筆者：やっぱり規模が少ない方がそういうのがしやすいんですかね？

W:うーん、どうでしょう。(…) (中略) [大きい] 施設だと、小鉢とかに決められたものが出てくる感じはあるかもしれないですね。家庭的といえば家庭的だったんじゃないかな、比較して。

(Gr 1)

大舎制とGHでの食事に関する語りである。違いを聞いた筆者に対してWは大舎では作られた者を配膳する方式、GHではキッチンを友人と使ったり他の入所児童と協力しながら片付けたりし、家庭的な環境であったと答えている。あまりはっきりとした回答をしていないが、GHの方が配膳の方法や片付けの機会に関しては多いことが伺える。また、GHではキッチンの利用の自由度があることも読み取ることができる。

筆者：Mさんも、50人全員で食べてたんですか？

M：僕んとこはそうですね。大きな食堂 (…) そんな大きなスペースがあって。／／W：昔　ながらの。／／うん、昔ながらの。(…) 僕は大きくなってから行ったから、イメージチックにすると、一番分かりやすいのは、小学校の時の給食。で、それを朝とかはお皿にこうボンボンボンって乗せて、みそ汁とかは自分達で持ってくんだっけかなーちょっと忘れちゃったけど、そういう感じで。(中略) やっぱり大きくなった時にその、なんていうの、家庭でお母さんがご飯を作って、出して、それを食べるっていうのと給食って違うでしょ？ (…) うん、だからやっぱりずーっとああいう所で生活、要はそういう子だったら一般の家庭に入って違和感はあると思うね。(…) で、いいのか悪いのか分かんないけど、小学生的には楽しいのかもしれないね。

筆者：皆でわいわい食べれるから。

(Gr 1)

Mの発言した大きな食堂に対してWが昔ながらのものである印象を受け、またMもそれに同意しているのがわかる。さらに、施設での食事を給食と例えているMの発言からは、先のWが語った食事の配膳方法などと似た内容であることもわかる。最後にMは給食と一般家庭で母親から出されるご飯とは違うことを指摘して筆者に自らのイメージを伝えようとしている。

筆者：掃除とかっていつも共有スペースとかはしてなかったんですか？

M：しましたよ。(中略) 今の個室的になってきてるから、やっぱりいいなって思うし。(中略) やっぱ人間として自分のプライベートスペースっていうのは大きくなってからでもいいから確保すべき

だと思うね。それは必要なことじゃないかな。

筆者：自分のスペース感って言うのは個室から生まれると？

M：と、思いますよ。

筆者：自分の使えるスペースはここだっていうのがはっきりしてるってことが。

M：それは、うん、影響あると思うな。

(Gr 1)

ここではMが個室を与える必要性について述べている。大舎制の施設では自分一人が使える空間が明確になっていることは少ない。したがって、それを物理的な壁で仕切る個室という空間をつくることで自分のスペースである感覚が生まれるという考えが読み取れる。

T：なんか靴下とかも、片方無くなるもん。皆と一緒に洗うと。／／W：あー。ある！なんでだろうね、あれね。／／

T：片方しかない！みたいな。すごい嫌だったし。それに、職員は大きいものだし、全部まとめて洗って乾燥機かけるの。最終的に。だから、最終的に乾燥機にかけちゃうから、ちっちゃくなって戻ってくんの。それがすっごい嫌で。

C：そう、業務用だからね。

(Gr 2)

Tが大舎制であった自分の施設の洗濯の仕方について語っている語りである。人数が多く、洗濯物の寮が多いために作業効率を優先する職員のやり方に対し、他人の洗濯物と一緒に洗われること、乾燥機にかけられ衣服が傷んでしまうことが不満であったことがわかる。同じ大舎制で暮らしていたCの発言は生活単位の大きさのため仕方ないとしながらも、Tの不満に共感していることを伝えている。

W：そこで何人寝てたの？

C:小学校（…）んー、何人寝てたかな？5,6（…）、自分寝た後は何人寝たかは分かんないけど。

W：あー、そうなんだ。

C：寝たらどんどんどかされるんだよね。／／W：じゃあ、あとからわんさかわんさか（…）。すごい環境だね。／／

C：だから、最初8畳部屋だとすんじゃん。で最初寝るとするでしょ、きれいにふとん敷いて。そうすると、小学生寝たら動かして次自分寝て、で、どんどん動かされて、大きい人にどんどん動かされていくから。起きたら「あれ、真ん中で寝てたのに端にいるな」とか。

W:すごい環境だね。／／C:人数多かったからね、本当に。／／

(Gr 2)

大舎制における大部屋の就寝状況がわかる。年齢や学年によって就寝時間が少しずつずれているが、自分の決まったスペースが決められておらず、いわば機械的に順々に詰め込まれていく様が語られている。40人規模の施設での生活経験をもつWが驚いているなか、Cは人数の多さ故仕方ないと冷静に受け止めている。ここでも、Cが生活単位の大きさに諦めを覚えながらも、受け入れるしか

ないと感じていることが読み取れる。

S：大部屋（…）個室はそのときはなかったから。普通ワンルームサイズの、こういう部屋［いる部屋をさしながら］、だいたいこの一室で大部屋一つぐらいな感じ。そこに多いときで７人、少ないときで（…）

T：えー、狭いじゃん。キツキツじゃん。／／S：そうそう。そこにイスもタンスも入れとったから、もう居住空間なし［笑］／／うわー。大変だね。

筆者：自分のスペースみたいなのは（…）／／S：ないないないない。／／

T：逆に大変だね、そんな狭いとね。うちもっと広かった。うちこっち広さぐらい［隣の部屋を指して］。

S：そうなんや？

筆者：自分のスペースが無くて困った事とかなんかありますか？

S：うーん、そん時私は５歳か、中学生になるまで必要は無かった。むしろそういう意識が小さい頃から入っとるせいかな。なんか自分のスペースがなくても、特に必要がなかった。

(Gr 3)

部屋割を説明するＳの話を聞き、Ｔがその狭さに驚く。Ｓは居住空間がないという表現を使い狭いことを認識し、個の空間は全くないと強調している。困ったことがあるかという筆者の問いには、意識として植え付けられているせいか必要がなかったと回答している。

iii：立地環境

最後に、施設の立地についても、児童にとっては重要な環境のひとつであることがわかる語りである。

M：（中略）知らないっていう意味では、入りづらい環境ではあるし、理解されづらい環境だったのかなと。閉鎖的っちゃ閉鎖的だから。地域に関してはね。で、今は、そこが少し施設が新しくなったから、なんか新しいルールがあるらしくて、玄関をつくらなきゃいけないと。

／／筆者：地域の人が入れるような？／／そうそうそう。だから、へぇーと思って。そういうルールがあるらしいんですよ。取り組みとして。だから、それっていいことだねって思って。

やっぱ地域にあるんだから溶け込む必要はあるよね。施設って大概遊び場があるからさ、うまい考えで言ったら、そこは子どもたちにしたら一般の子どもたちだったら入れて遊べる共有スペースにすべきじゃないかなとは思うね。そしたら、小さい頃からそういう子供がいるんだって言うのが当たり前の中に育つんじゃないかな。

(Gr 1)

地域に対して閉鎖的であることを課題として認識している施設は少なくない。また、その中でも施設理解のために多くの人に施設のことをきちんとわかってほしいと考えている施設も多い。この語りでは、施設が玄関をつくるという地域開放への策とともに、Ｍより地域に溶け込む方法のひとつとして施設の遊び場を地域の共有スペースにす

ることで周りの児童にも自然と受け入れられるようになる考えが示されている。

C：あと、ちょくちょくね、自分自転車なかったから、どこ行くにも歩きか電車だったから。
T：うち、ほとんどバスだったな。
C：あれだよね、うち都心だったから、歩くしかない。／／T：うち田舎だった。／／
W：交通手段とか全然違うよねー。
T：一駅がすごい遠いの。5分10分が当たり前みたいな場所だったからさ。
筆者：一駅間が？
T：そう。すごい田舎だったからさ。
W：それによる差って結構あるよね。
C:うち都内だったから、もう逆に歩くか電車かっていう。／／T：うち自転車。／／うち自転車なかったんだよね。

(Gr 2)

田舎の施設に住んでいたTと都会に住んでいたCとの対比が強調された語りである。施設の立地環境は児童の行動範囲や日常で利用する交通手段の選択に影響を及ぼす。Cが徒歩または電車という交通手段を利用していたことよりTがバスであることを主張、その後すぐに自分の施設の立地環境の違いを指摘しあっている。また、Wが立地環境による差異に共感していることからも、施設の立地が影響力が大きいと全員が認識していることが読み取れる。

第3節　まとめと考察

本章では、児童養護施設に入所していた経験のある方々のグループ・インタビューにより、その当時の生活体験やそのときの居住環境、また現在の生活への影響を探った。

①当時の生活では、生活体験について、施設でのプログラムによって、児童の体験の有無に差があることが目立った。また、調理の面では特に、調理場と食事場所の一体的なつながりが児童へ調理体験の意欲をかきたてていることがわかった。そのような感覚が生まれない不安を感じている人もおり、また、一般家庭で育った児童との金銭的な感覚やスーパーなど利用施設の違いを認識している人もいた。一方で、掃除や洗濯などの習慣は一般的に施設では徹底されているが故に、一般家庭よりもその習慣がついていると考える人が多く、その発言も多くみられた。

②他者との関わりでは、前章でも予想されたように、施設による違いが顕著にあらわれた。地域や市・県などによって行事などに招待を積極的にうけるところでは、さまざまなエピソードが語りの中で飛び交った。しかし、地域との交流は記憶にないとした人もおり、また、その理由を施設の運営団体の宗教的系列により、地域の雰囲気や風習などに溶け込めなかったこととして指摘していた。この事例からは、職員と地域との関わり方もまた地域との交流の深度という形で児童の生活に影響していると捉えることができる。

③退所後の生活へ与えた影響としては、施設での

生活行為の習慣化、集団生活によって身に付いた感覚、そして将来的な方向性や職業にあらわれていることがみられた。習慣となっている内容としては、徹底された掃除の仕方や業務用であると思われる道具、きちんとお礼状を書く習慣などが身に付いていることが読み取れた。その一方で、その行為を作業という感覚で捉えていることが、「学校みたいな感じで掃除している」という発言などからみられている。また、複数のグループで挙げられた語りとして、集団生活によって待つ、我慢するなどの行為に対する許容力があると感じていること、環境が変化してもそれなりに対応していける適応力があるとかんじいていることなどが読み取れた。これらに関係してか、人と関わる仕事、施設の戻り約に立てるような職業を選択しようとしている語り手もいた。また、自分では意識していなかったにも関わらず、ハローワークなどの適性検査で福祉系に対する興味を指摘された経験から、施設での生活からの影響を実感した語り手もいた。

④施設での生活に関わる空間で主に語られていたのは、個の空間に関してである。語り手のほとんどは大舎制の児童養護施設で育っており、個室による自分のスペース感の重要性を感じている語りが多くみられた。それらは特に掃除などに影響している。先の「学校みたいな感じ」という発言もあったが、自分のスペース感がないために、意欲的に清潔にする、片付けるという意識をもたず、結果的に複数の児童が利用する共有の場所は乱雑な状態が多かったことが語られていた。施設形態の特徴としても、大勢で生活を行い、作業が分担制になることや効率的に過ごしてしまうことから自由度が低くならざるを得ないことがわかる。

⑤最後に、立地環境についてである。偏見のない環境を目指して、施設理解のための施設開放を図っている施設は多いが、ここでは入所時にそれを実際に目の当たりにしたエピソードが語り手によってみられた。また、立地環境は施設からのアクセスに大きく影響しており、児童の行動範囲や利用施設の選択を限定してしまうことがあることがわかった。

第４章　施設の立地環境

第１節　目的と調査概要

1-1.　周辺環境と地域関係

これまでに、第２章では地域の中の児童養護の現状を把握し、地域との関わり方の質および施設の課題である自立支援に周辺環境や地域との交流が重要な役割を担っていることを明らかにした。また、第３章では、実体験をもとに施設での生活が退所後の生活に影響しており、さらに児童の生活体験に立地状況や空間配置が影響を及ぼしていることも明らかにしてきた。これらの分析結果は、児童養護施設を取り囲む環境が児童の生活にどのように影響しているか、どのような役割を果たしているのかについて、その実態を示しているものといえる。

本章では、事例を個々に取り扱って分析することで周辺環境と地域関係の実態をより詳細に把握し、施設の立地環境について児童の居住環境との関わりを探ることを目的とする。

1-2.　調査方法

この調査の対象とする児童養護施設は以下のような条件と手順により選定した。

①第２章で図解化した施設の課題の全体構造図（図 2.3.1）より、同章の考察より、「周辺環境」および「施設と地域の関係」の２カテゴリーにおいて、改善点を挙げた 65 施設に着目した。

なお、「外部空間」の下位カテゴリーのみ、児童の自立支援に対しての改善点ではないため、除　いている。

②それら 65 施設のうち、具体的な対策や考えを記述している６施設と具体的な問題意識を記述している10施設の計16施設にさらに絞り込んだ。

③さいごに、アンケート時に図面提供に協力して頂いている施設のうち、事例調査という調査方法をふまえ、戸建ての GH 形態の１施設を除いた計８施設を調査対象予定施設とする。

以上のような手順で事例選定を行い、調査対象予定の８施設に、①提供して頂いた図面や筆者がインターネット上の Google Map を利用して作成する配置図を分析資料として掲載する許可、②電話でのヒアリング調査の協力願いについて調査依頼をし、全施設から許可を頂き、全８施設を本調査の調査対象とした。

電話でのヒアリング調査では、アンケートの回答結果をもとにしながら地域の関わり方や日常的に利用する施設内空間や周辺地域の場所について、筆者が質問し、それに各施設長の方に答えてもらうというインタビュー形式で行った。ヒアリング調査は 2010 年１月 17 日から 22 日の６日間にかけて行われ、一施設10分から20分程度であった。

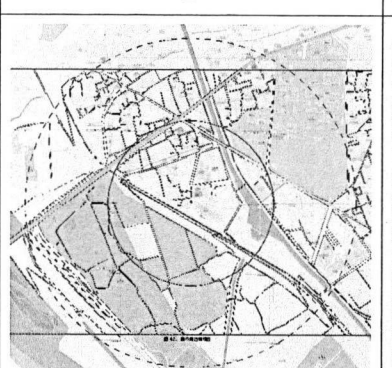
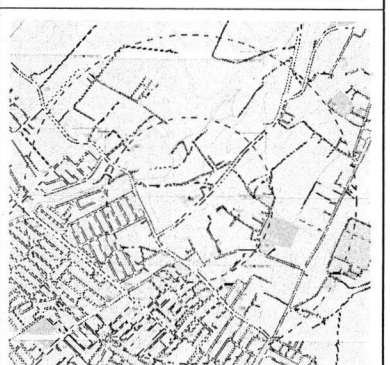
1-3.　調査事例の概要

次頁に調査対象の事例概要を載せる（図 4.1.1、図 4.1.2）。

第２節　立地環境と児童の居住環境との関わり

2-1.　事例ごとにみる立地環境の分析方法

各事例のヒアリング調査は IC レコーダーを用いて録音し、第３章と同様のトランスクリプションの表記を用いて逐語録を作成した。ただし、場

表 4.1.1　事例概要の一覧 1

児童構成意図 ＼ 施設名			C園	H園	Q園	K園
施設概要	設置主体		社会福祉法人	社会福祉法人	公設民営指定管理者制度	社会福祉法人
	建物構造		小舎制	大舎制	連棟型	大舎制
	周辺環境		住宅地	住宅地	住宅地、農村地、工業地	農村地
	在籍数／定員数		37/40	29/30	58/60	86/110
	生活単位数		4	―	4	4
アンケート回答結果	食事	現状	食堂で、基本的に全員で。各ホームごとにテーブルセットあり。調理は調理専任の方が3人で携わっている。	園内食堂にて、幼児8名・就学児4.5名のグループごとに。調理師がメニューにそって調理する。	ユニット内で、ユニット内の人数15人を原則として食事。調理員が厨房で作っている。	寮の食堂で、自分の居室の仲間と職員6人ぐらい。調理員が調理場で作っている。
		改善点	各ホームに調理場がなく全て食堂に集まる。両方の利用可能が望ましい。全員だと賑やかになるので、時間をかけのんびり食べたい。	食堂兼集会室のためキッチン家電の使用が制限される。子供達が使用できる整備が無く、調理体験ができない。	調理を体験させていない（調理の大変さを実感できない等）、厨房と生活の場が離れている（生活実感が身に付かない等）	食堂が狭い。
	学習	現状	自分の机や会議室、ホームのテーブル、食堂、塾で、職員や学習ボランティアと、もしくは一人で公文や宿題、ドリルを行う。	食堂兼学習室または個別に会議室にて、主にグループごとに、教科書の復習や計算・漢字ドリルを中心に行う。	リビング、自室、事務棟の空き部屋にて、学習ボランティアと宿題や問題集を行う。	食堂、居室で、寮内の仲間や職員と学習をする。基本的に自習。
		改善点	個々での学習はどうしても進まない。自分の机でじっくりできると良いが幼児も同じホームにいるため落ち着かない。	特に中学生以上の学習室がないため支障をきたしている。状況に応じて会議室を一カ所開放している。	学習室等の設備が不足している。	教える職員の配置が少ない。勤務する職員の絶対数が少ない。
	就寝	現状	ホームの個々のベッドで就寝。同室に4人、保育士が添い寝することもある。	居室にてグループごとに就寝する。幼児は担当保育士と一緒に。	自室にて、2人部屋を原則として就寝。	居室で布団を敷いて寝ている。
		改善点	同室で小さい子が寝る時に大きい子がTVや勉強をする。しかし、個室では児童を隔離してしまうことも考えられる。	居室の構造上、幼児の就寝が早めになるが静かな環境ではない。中学生の居室はプライバシーの確保ができない。	原則、個室でなければプライバシーは守れない。	寝具の老朽化。毎年の予算が少ないため。
	掃除	現状	毎日朝夕、全員で生活場を掃除する。	基本的に毎日居室を行う。小学生以上は自分達で。	児童は週1で自室と共同区域を、職員は毎日共同区域を掃除する。	午前中は職員、夕方は児童が当番制で、自分の寮の掃除を行う。
		改善点	部活で帰りが遅く、日によっては小さい子が中心になってしまう。	食堂、プレイルーム、体育館は職員が。細かい所は目が届かない。	―	掃除のしつけの改善。伝承されていない。
	洗濯	現状	毎日、洗濯場で。小学生以下は職員、中高生は本人が行う。	中学生以上は自分達で週3回、洗濯機のある乾燥室または浴室で。	中学生以上は自分で。習慣化できていない子は職員がサポート。	毎日、職員が洗濯場室で行う。
		改善点	日が当たる時間が場所により少なく、干すのに不便を感じる。	一カ所しか洗濯室がなく、時間差で洗濯せざるを得ない。	洗濯場所が十分確保できていない。居室にベランダが無い。	洗濯のしつけの改善。伝承されていない。
	入浴	現状	2年以下は保育士、3.6年男子は男性職員、中高生はグループで。	幼児は職員と、小学生以上は自分達で入浴する。	低学年までは職員と、高学年以上は原則一人。	寮の仲間や職員と、週3回の入浴。
		改善点	各部屋にお風呂がほしい。30年前の小舎制では難しかった。	男女別でないため時間差となる。毎日の入浴は管理、予算面で困難。	脱衣場と洗い場がフラットで床が腐食しやすい。	一般家庭の様々なユニットバスにて体験させたい。
	遊び	現状	皆自発的にグラウンド、各ホーム、裏山で。園の子供同士、時には園以外の子供とも遊ぶ。スポーツや砂遊び、ごっこ遊び等。	体育館や公園、プレイルームで主に園内の友達や近くの友人とボール遊びや一輪車、縄跳び等で遊ぶ。	施設内や近隣の公園、公共施設に施設の子や地域の子とスポーツ、自転車乗りをして自発的に遊んでいる。	居室や食堂等の寮内、グラウンド、友人宅にて、施設内の仲間や施設外の友人と遊具やスポーツで遊んでいる。自由時間には自発的に。
		改善点	外で元気に遊んでいるが、ボールを他家に入れたり、乱暴になることもあるが仕方ないとも思う。もう少し広いグラウンドがほしい。	30人定員としては広い体育館でありのびのびと遊べる面が良い。	近隣のグラウンド等が自由に使えると遊びが広がる。	施設外の友人宅へ出かける事は少ない。マナーの問題や、施設内で友人関係が成立してしまって外に出かける事が少ない。
	地域交流	現状	学校やコミュニティセンター、園や公園で、学校の集まり、園のバザーなどに参加。自発的に誕生会や子ども会の集まりにも。	体育館や公園、高齢者福祉センターにて、子ども会や高齢者と、盆踊りや子ども神輿など。自発的にはない。	神社等に積極的にでかけ、地域住民と盆踊りや神輿担ぎなどの祭りに参加。イベントがあるときは自発的に参加している。	町内子ども会や運動会、祭り、文具店にて、友人や子ども会を通し遊びや祭り、運動会参加、手伝いをしている。
		改善点	もっと地域の人々に利用してもらえる施設づくり。コミュニティセンター、支援施設の併設を検討。	将来的には地域の方を招いてのバザーを計画している。プライバシーに配慮しながら積極的に地域に開いて行く事が必要と思う。	立地場所が地域の中心的な所から離れているので、なかなか地域交流が難しいのが現状。	―
	買い物	現状	一人または栄養士と、不足の物がある時のみ、スーパーや100円均一に。年に何回か中高生はお小遣いでおやつ・洋服を買いに行く。	高学年以上は自分達でおやつや飲み物をコンビニ、ショッピングセンターに行って買い物。祭典やお正月、クリスマスにも自発的に。	低学年は大人と、高学年は原則一人でスーパーやコンビニに食べ物等を買いに行く。貯めたお金が一定の金額になると自発的に。	一人または職員や友人同士で食べ物や文具、衣類を町内文具店やスーパーに買いに行く。祝祭日の自由時間には自発的に。
		改善点	もう少し児童が自分の買い物をする機会をもつ、手伝いとして買い物する経験をする、社会勉強（値段、お金を払う事を知らない）	望ましい金銭感覚を身につけさせるため、生活訓練費の使い方を工夫させる。小遣い帳や通帳の記帳等行わせている。	―	すぐ側に店がある訳ではないので、自由にとはなかなかいかない。
周辺図	◎ 徒歩圏を示す